象のふろおけ

世界むかし話■東南アジア

訳＝光吉夏弥　絵＝テプシリ・スークソパ

象のふろおけ

世界むかし話■東南アジア

訳＝光吉夏弥　絵＝テプシリ・スークソパ

ほるぷ出版

世界むかし話 11　東南アジア　象のふろおけ

発　行　昭和54年10月1日　1刷
　　昭和56年 4 月1日　2刷

訳　者　光吉夏弥
画　家　テプシリ・スークソパ

発行者　中森蒔人
発行所　ほるぷ出版
　　〒160　東京都新宿区新宿2の19の13
　　電 話　東京 (354) 7031

印　刷　図書印刷株式会社
製　作　東京連合印刷株式会社

NDC 908　22cm×17cm
落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

もくじ

ひとしずくの蜜……7
大きいぼうさんと小さいぼうさん……10
鼻まがりの魚……16
黒い絹のくつ……24
足が四本に手も四本……32
トラのしっぽ……36
ゆうれいの帽子……40
クマたいじの勇者……45
ペラの猟師……54
カエルの仕返し……59
金色のチョウ……64

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

カニと真珠……75
和尚さんのイチジク……81
王さまの秘密……87
ウサギとライオン……95
石の裁判……98
ホタル……102
王さまの裁判……107
ほら話……111
ゆっくりいけば……119
ばかなサルとりこうなカメ……121
マンゴーのなげき……126

象のふろおけ……129
トラとかけをした象……136
ネコとネズミはなぜなかが悪い……144
ふしぎな木……149
サルの生きぎも……155
ついてないスラ……162
ネズミジカのカンチル……172
カンチルのおとし穴　173
カンチルとワニ　181
カンチルと大男　187
知りたがりやのお姫さま……193

ばけものデイウォー……202
世界一大きなワニ……207
マノラ姫……217
アグンの山からのつかい……227
オウムはなぜ教わったことしかしゃべらないか……232
自由……238
自然のなかに……　テプシリ・スークソパ　243
南の国々からのはなし……　光吉夏弥　245

ひとしずくの蜜

あるところに、静かな、平和な村がありました。村の人たちは、だれひとり、声を荒らだてる者もなく、手をふりあげる者もいませんでした。

ある日、その村へ、ひとりの旅人がやってきました。旅人は大きな蜜のかめをしょっていました。その蜜が、なにかのひょうしで、ひとしずく、ぽたりと、道の上に落ちました。

道ばたのトカゲがそれをみつけて、ちょろちょろとはいよると、小さな舌で、ぺろぺろやりだしました。

すると、屋根の上にいたネコがみつけて、とびおりるなり、ひと口でトカゲを食べてしまいました。そして、さも満足そうに、口のまわりを前足でふいていると、こんどはイヌがネコをみつけて、とびかかってきました。

それをみて、ネコの飼い主が家からとびだしてきて、長い棒でイヌをたたきつけました。

イヌはキャン、キャン、大声で鳴きました。それを聞いて、イヌの飼い主が向かいの家からとびだしてきて、ネコの飼い主にくってかかりました。

はじめは、ただの口げんかでしたが、たちまち、打つの、けるののおおげんかになりました。

そのうちどっちの家からもたすけがとんできて、さわぎはいちだんと大きくなり、親類や友だちまで応援にかけつけてきました。

とうとう、村じゅうが二派にわかれての大乱闘になり、丸太ん棒をふりまわしたり、石を投げつけたりする者まで出ました。

あげくのはてには、古い鉄砲まで持ちだしてきて、うち合いがはじまりました。

もうこうなれば、けんかではなくて、戦争です。

それでも、かたがつかないので、両方がとなりの村へ応援をたのみにゆき、さわぎは村から村へひろがって、都の王さまの耳にまでとどきました。

王さまはさっそく軍隊をくり出して、とりしずめ、それでやっと、村には平和がもど

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

りましたが、もとはといえば、たったひとしずくの蜜(みつ)だったのです。

（タイ）

大きいぼうさんと小さいぼうさん

ある村のお寺に、和尚さんと、小ぼうずがひとりいました。

和尚さんはのっぽで、小ぼうずはちびでした。それで村の人たちは、和尚さんのことを大きいぼうさんといい、小ぼうずのことを小さいぼうさんとよんでいました。

小さいぼうさんは、まだ修行ちゅうでしたが、ほんとに一人前のぼうさんになりたいのかどうか、自分でもよくわかりませんでした。

なったところで、大きいぼうさんがいるかぎり、この寺では、うだつがあがりそうにありませんでした。

それに、この二、三カ月、いっしょにくらしてみて、大きいぼうさんが、とんだばかだということがわかりました。それなのに、村の人たちは、ばかなのは大きいぼうさんではなくて、小さいぼうさんだと思っているようでした。

それやこれやで、小さいぼうさんは、ある日、おじさんのところへそうだんにいきました。

「いくら修行したって、あの寺ではうだつのあがりっこがありません。それに大きいぼうさんのばかなこととといったら、お経の文句ひとつ、ちゃんとおぼえていないんです。村の人たちにお経のことばがわからないからいいようなものの、そうでなかったら、みな、おこりだしてしまいますよ。」

「おまえのなやみは、よくわかる。」と、おじさんはいいました。「けれども、一人前のぼうさんになるというのは、なにもゆかいにくらすことではないんだよ。おまえがいま、ぼうさんになるのをやめてしまったら、おとうさんも、おかあさんも、どんなに悲しむことだろう。みんな、おまえのことをほこりに思っていて、たとえ何年かかろうと、おまえがりっぱなぼうさんになるのをまっているのだよ。」

小さいぼうさんには、おじさんのいうことがよくわかりました。

それで、ぼうさんになる修行はやめないことにしましたが、村じゅうの人たちに、ほんとにばかなのはだれなのか、わからせてやらなくちゃと思いました。

さて、つぎの朝、ごはんを食べていると、小さいぼうさんがなにかおいしそうなもの

を食べているのをみて、大きいぼうさんが聞きました。
「なにを食べているんだい？」
「水牛の肝臓ですよ。」と、小さいぼうさんはいいました。
「おいしいかい？」
「おいしいですとも。まだ、食べたことがないんですか？」
「ない。」
「そんなら、少し食べてみませんか？」
大きいぼうさんは、ひときれ食べてみて、とても気に入りました。そして、もっとほしがりました。
小さいぼうさんは、皿ごとやってしまいました。けれども、大きいぼうさんは、まだほしがりました。
「水牛の肝臓が、こんなおいしいものとは知らなかった。もっとたくさん手に入れるには、どうすりゃいいんだい？」と、大きいぼうさんは聞きました。
「かんたんですよ。」と、小さいぼうさんはいいました。「水牛があくびをするのをみたら、背中にとびのって、のどに手をつっこんで、肝臓をひきぬきゃいいんですよ。」

「そんなことをしたら、水牛は死んでしまうだろう。」
「大丈夫ですよ。まあ、やってごらんなさい。」
そこで、大きいぼうさんは通りへ出かけていって、道ばたでぶらぶらしていた水牛のそばにたちました。
すると、まもなく、水牛は大きな口をあけて、あくびをしだしました。
それをみるが早いか、大きいぼうさんは、水牛の背中にとびのって、のどに手をつっこみました。
水牛はびっくりして、目をぱちくりさせながら、あわてて口をとじました。
大きいぼうさんは、腕をひきぬこうとしましたが、ぬけませんでした。
水牛は、のどをぐりぐりやられて、いたくてたまらないので、むちゅうでかけだしました。
村の通りを、大きいぼうさんが水牛の背中にのって、片腕を水牛の口につっこみ、片腕で水牛の首にしがみついて、どんどんはこばれていくのをみて、村人たちはふしぎがりました。
「いったい、なにをしてござるんだろう?」

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com